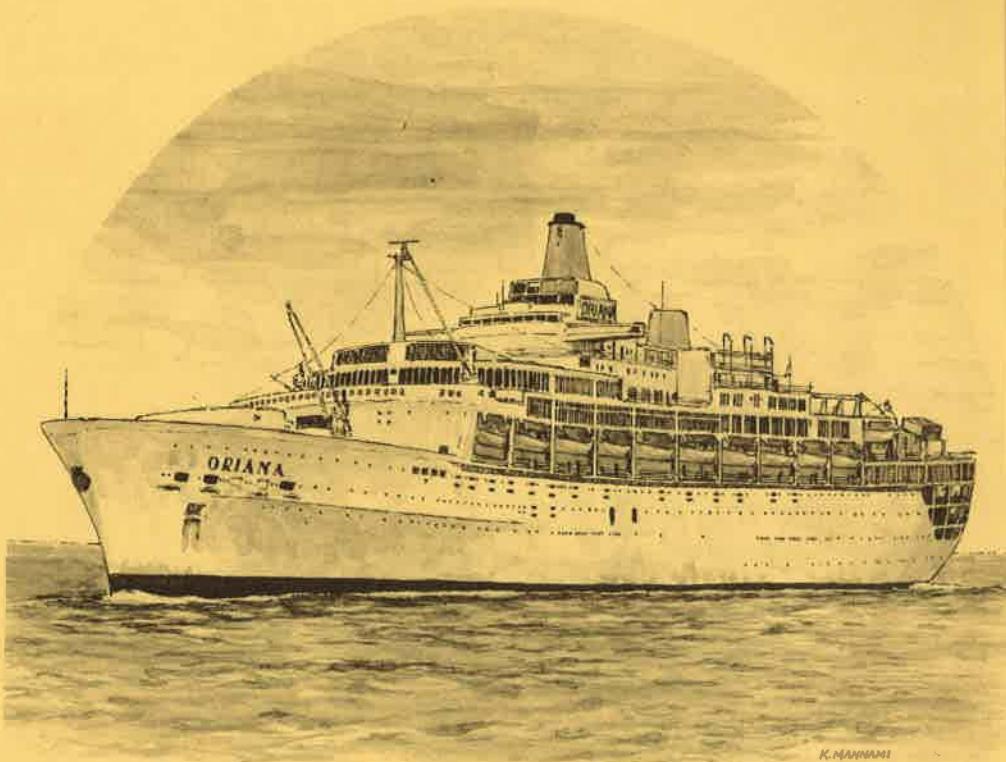


月刊・ブルーアンカー

Blue Anchor



K. MAHNAMI

第13号

海文堂書店 1983・2【13】

〒650 神戸市中央区元町通3-5-10
(電)

海文堂案内板

郷土誌の窓

ぶつく・えんど

メリケン波止場（中）

私の楊貴妃——『長恨歌』の思い出——

昭和五七年に読んだ本から

赤松氏研究の思い出

敏馬・そしてみるめの関

藤本哲

松本翠耕

植村達男

真砂早苗

8

2

36

31

27

20

16

12

角本総

目

次

敏馬・そしてみるめの関

松本萃耕

ことになる。そのみずみずしさを表現した言葉でもある。また一方ではミソギの水のほど走る形容詞でもあるとう。

敏馬神社というのが神戸市灘区岩屋中町、阪神電鉄岩屋駅の南方の国道二号線沿いの高台に在る。

このあたりは今は海岸線が退いて埋めたてられ、工業地帯化したり、摩耶埠頭が建設されたりしているが、昔は砂浜の美しい海岸線だった。

神社の創設は、いつのころかわからない。だが九二七年に完成したといわれる法規集の『延喜式』には、敏馬神社の名が記載されているので、一千年以上前からあつたことになる。

敏馬神社の祭神はミツハメという名の水の女神で、原始信仰から生れた神である。

ミツハメはミツハ女だから、ミツハとは何か、から考えてみよう。

簡単にいってしまふと、ミツは水葉で、水中の草葉の

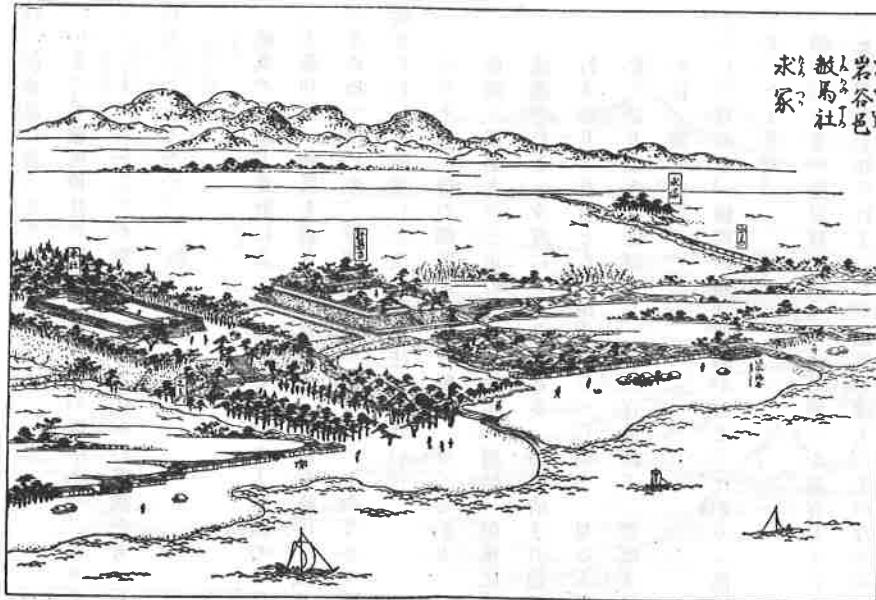
ることがわかる。
次いで禊ぎである。

古代原始社会では、貴子の出生にミソギの水をそそぐ仕事に従事したのが壬生部の人たちだった。壬生部は湯坐部、丹生部、湯母部、乳部など職業化していくが、その中心が氏族の長の近親の女で、出生した貴子と第一の結婚をするのが古い形式だった。

出生にはミソギの水をそそぎ、乳を与える、育児に加えて成長すれば性教育まで担当していたのだ。この湯坐部たちが信仰したのが、ミツハ女の神だった。

ミツハは転訛してミルメ・ミヌメとなる。

敏馬神社のミルメは、こうした縊縛で生れた言葉である。敏馬の漢字も、これは吳音のミムメから当たる音借文字にすぎない。同じ音借文字で、三犬女・美奴壳・見宿女・汝壳などの字も使われていたこともある。



『摂津國風土記』「逸文」に「美奴壳」というは神の名なり」と記されているように、ミツハメの神を祀ったから、これが地名になつたのは理解できる。

だが神を迎えて祀つたのは息長帶比壳だとしているの

『日本書記』の神功皇后（息長帶比壳）記のなかの、住吉三神の出現する場面に「日向国の橋の小門の 水底に 水葉も若に出でいる神 名は表筒男・中筒男・底筒男の神……」とある。

若わかしい水草の葉のように、みずみずしい住吉三神の誕生を表現している。

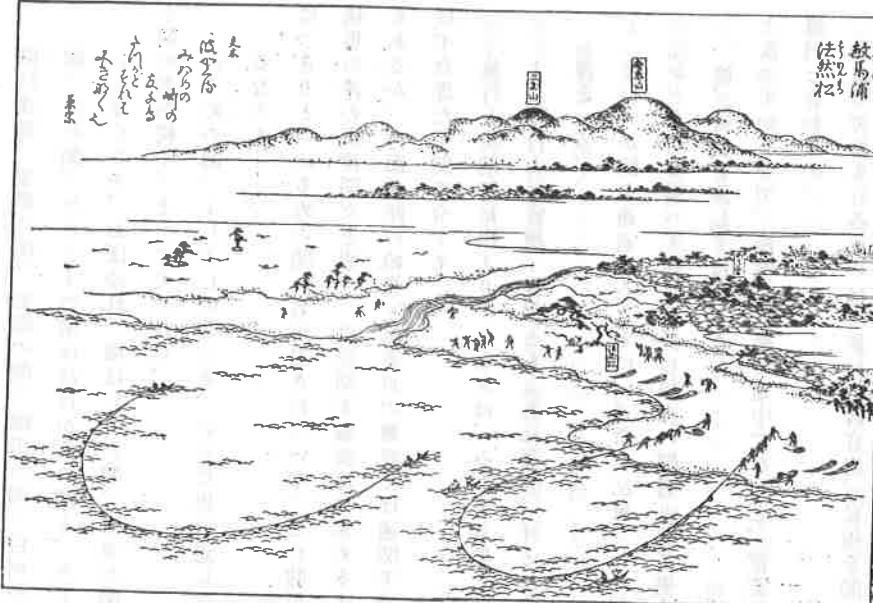
また「出雲国造の神賀詞」にも「をち方のふる川岸こちらのふる川岸に 生い立てる若水沼間の いやかえに み若えまし すすぎふる 出女の水の 水沼間にて身を沐浴そそぎ……」とある。

古い川の岸とみずみずしい若水葉の生いたつ姿が鮮やかで対照的である。処女のそそぐ禊ぎの水の状態もよくわかる。禊ぎも若返りの要素であることも理解できる。

こうしてみるとミツハはミヌマと変化しているが、更にミヌメ・ミルメ・ミルマそしてヒルマ・ヒルメと転訛するが全て同意義だ。そしてミツハは水と深い関係があ

は、伝承話に従つただけだろう。

いまでも敏馬神社の境内に湧き水の跡がある。おそらくミソギの水としての聖池だった古代人の遺構と考えられないこともない。



敏馬の名は万葉歌に多くでてくる。柿本人麻呂の歌に「玉藻刈る 敏馬を過ぎて 夏草の 野島が崎に 舟近づきめぬ」はじめ、短歌や長歌が数多い。そのなかで敏馬をくわしく描写した次の歌に注目したい。

八千矛の 神の御世より 百船の はつる泊と 八
島国 百船人の 定めてし 敏馬の浦は 朝風に
浦波さわぎ 夕波に 玉藻来寄る 白砂清き浜辺は
行き帰り 見れども飽かず うべしこそ 見る人毎
に 語り継ぎ 倦びけらしき 百世経て 倦ばえゆ
かむ 清き白浜

こうして見ると、敏馬の浦は百船がとまつた泊り（港）であったようだ。

摂津国はその海岸線に沿つて津（港）が並存していたことは、よく知られている。敏馬の津もハそのなかの一

つだった。

ところで、この敏馬の津に、どうしてそんなに多くの船が停つたのだろうか、という疑問がわく。私はここに海の関があつたからではないかと思う。

大阪の難波の津を出た船は、まず敏馬の関へ寄つて通関の検査を受けなければならなかつた。この情況は、次の長歌の一節をみてもよくわかる。

朝されば 姉が手にまく鏡なす 三津の浜べに 大
舟に真かぢ しじぬき 韓国に渡り行かむと ただ

向う敏馬をさして

というように、三津の浜（大阪の難波津）から船に乗つて韓國へ行くのだが、まずは直接敏馬へ向つて出航したのだった。

おそらく遣新羅使だろうが、やはり敏馬の関で検査をうけたと思われる。

七五七年（天平宝字元年）施行の「関市令」という古い文献に、摂津関の名がある。順序を追つて説明すると、

関を通過しようとする者は過所を請求せよ。

船や筏で関を通過する場合も過所を請求せよ。

という規定がある。過所というのは関所手形のようなもので、現代風にいえばパスポートの請求である。

それには旅行の目的、官位、姓名、年令、などが書きこまれる。当時の身分制度をうかがい知ることができるのは、過所の記載項目のなかに「奴婢が従う場合は、その姓名、年令、携行品の主なもの」と指定されている。奴婢という名のドレイがいたのだろう。

船や筏で関を通過する場合も過所を必要としたが、その関とは

関は長門及び摂津をいう。その余の関は過所を要しない。

としているので、長門と摂津の海関だけが過所が必要で、過所を提出して検査をうけるのが規則だった。

ここにいう摂津の関とはどこだろうか。難波津とか敏馬、大輪田（兵庫港）などが推定地にあげられているが確定的なものはない。だが私は敏馬の関を比定地にあげたい。

敏馬に関があったことは、清少納言の『枕草子』に、その名がでている。

関は逢坂。須磨の関。鈴鹿の関。岫田の関。白河の関。衣の関。ただごえの関はばかりの関と、たと

しえなくこそ、おぼゆれ。横はしりの関。清見が関。

と関の名が続く。そしてその次に、

みるめの関。よしよしの関こそ、いかに思い過した

るならん……。

はつきりと「みるめの関」名が記されている。この関が

敏馬の津の摂津関だと思う。摂津関を難波津に求める人

もあるが、内海航路の始発・終着点の難波では通関手続

は不合理だ。関市令でも、

旅行人が関津に出入りするときは、みな先着順とせ

よ。旅行人は公用・私用ともこれに従え。津とは摂

津をいう。

旅行人が関を通過するときは、過所に記載された関

かどうかを調べて通行を許し該当の関名と異なる場合

は、通行を許してはならない。

となつてゐるので、海関は航路の途中でないと、前記の規則と合わない。

ところでおもしろいのは、旅行人は公用・私用を問わ

ず、先着順に従えというのは、律令下でも官員優先でないのが愉快だ。

話をもとに戻すと『摂津名所図会』にも「敏馬の関」

いまは廃してなし」と書かれている。敏馬に関があつたことは疑う余地はない。それが摂津の海関だった。

岩波書店の『古典文学大系』「枕草子」一一一段の頭

註に「みるめの関は近江か」とあるが、これは敏馬の津のみるめの関であることは動かしがたい。訂正してもらいたい。

敏馬の関には、もう一つ重要な任務があつた。それは新羅からの入朝者への饗應である。『延喜式』に

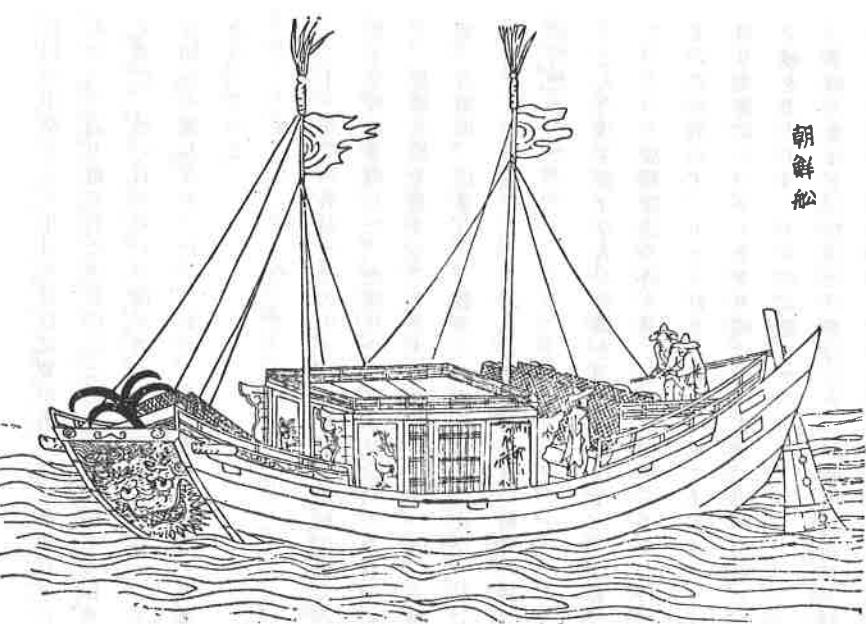
新羅客が入朝すれば神酒を給す。

大和國の片岡神社と、摂津国の広田、生田、長田の三神社から、それぞれ五〇束づつ、合せて二〇〇束

を生田社に送り、生田社で酒をつくつて敏馬の崎で

給す。

と規定されているように、先進国的新羅からの入朝使に對しては、敏馬の津で神酒を供應する國際的行事があつた。といつてもこれは現在の検疫のようなもので、神酒



朝鮮船

によつて外来者が持ちこむかも知れない疫病を封じる呪術的な意味があつたのだろう。

須磨の関が歴史上の文献にその名が出ないと同じよう
に、敏馬の関も史的文献には見あたらない。しかし摂津
の関としての敏馬に海関があつたのは、ほぼ確定しても
よい。

敏馬の名は少なくとも一千年前から継続した地名で
あり、敏馬の津は海關として律令制奈良朝期に、その機
能を果したのである。

赤松氏研究の思い出

藤本 哲

はじめに

「金持ちになるでない、貧乏するでない」

これが、草深い赤松の私の生家の家訓であった。金持ちになると人の妬をかい、あるいは驕りたかぶつて家を潰す。反対に貧乏すると田畠や家財を売り尽して、やがて村を逃散せねばならなくなる。いずれにしろ細々と、平凡に竈の煙を絶さないで家名を保持しなければならない。欲ばらず、飾らず、ひたすら家業に専念して黙々と働け、という教えであった。

しかし、この家訓には重要なことが負託してあった。それは、代々にわたって赤松家の尊崇を集めていた白旗八幡宮の護持という、かくれた責務である。何故そうなつていたのか判らないが、八幡宮を護るために、わが家の保持が絶対条件で、前述のような家訓のもと、永遠

に村の中堅として生計を営む必要があつた。父祖代々にわたつて語り継がれた赤松円心とその一族に関する伝承と共に、幼い日からい聞かされた家訓が、私はいつも念頭から離れなかつた。これが、私の赤松氏研究の基盤となつてゐる。

まなびやで

二十一年間の教員生活の中で、三年間を母校である赤松小学校に奉職した。地域社会を学ぶ社会科の教材の中でも、故郷赤松を教えることが大変な苦行であつた。古城址、古戦場、伝承など、数多くの事例はあつたが、私には何ひとつ自信をもつて語ることのできない研究の浅さに愕然とした。

こんな浅学菲才な者が故郷を語る資格はない。以来、こつこつと故郷探訪の時を過ごした。何から手をつけてよいのか判らず、カメラ好きの私は、何でもかんでも手当り次第にシッターをきり続けた。古老に史蹟を糺し、文献を求めてはノートに記録した。

学級文集など、たびたび発行したが、歴史記述など到底書けるものではなかつた。教師集団の中で、よく郷土

史研究のサークル活動などがあつたが、私は近寄り難くて傍観するのがやつとという無学ぶりであつた。一時、全国の国語研究サークル誌「耕人」に属したが、作文教育によく活路を見出した程度で、自分の力量のなさにさいなまれる日々であつた。

発心

故郷赤松には英傑赤松円心が出てゐる。あの凄まじい中世の戦乱の中に、播磨の一角から中央の政界へ、荒武者を辛うじて雄飛した武将の一代記をまとめ上げよう、と私は発心した。昭和四十四年三月、家族・先輩・縁者の制止をはねのけて退職した。幼時から沸々と煮えたぎつていた赤松探求の夢を、一気に爆発させたかつこうで、教職を棄てたのである。

細々と私塾を開き、生計の道を確保しながら、本格的に研究一筋に打ち込んだ。しかし、それは苦難の道であった。

赤松円心という人物があまりにも引きかつたのである。

東奔西走、その足跡の広いこと、関係事象の多いこと、文献・史料が散逸し収集が容易でないこと。最たる困難

は、江戸時代・明治維新、そして日本の敗戦まで、皇国史觀からいえば倭奸逆臣のそれで、殊に足利尊氏の參謀であつた円心は、あたかも逆賊の頭目とみなし、その研究に批判的、あるいは無価値を説いて白眼視されることであった。

そのことを如実に語るのは、赤松の血脉をひく一族の中に、身分をかくし、代々伝わる文献・史料・遺物を秘蔵、あるいは焼却し、名字をえて時の流れに身をひそめる人の多いことであつた。皇国史觀が消え、南北朝並立史となつた今日でさえ、あしづまに赤松を誹謗する人さえある。ある教委主催の講演会で、直接、私に浴びせられた悪口雜言は、今も忘ることは出来ない。それが、社会的地位の高い人だけに、歴史を知らないゆえの赤松蔑視とは思うけれど、正史確立の必要を痛切に感じたものである。

仲間

歴史の好きな者は変つてゐると、よく耳にする。たしかに、歴史研究に憑かれると、ただ一筋に探究してやまないのだから、はたから見れば変人に見えるのかも知れ

ない。今の時世からいえば、金にならない仕事なのだから、なおさらであろう。

しかし、仲間は意外と多いのである。歴史専門の月刊誌も多いし、郷土史類の単行本も相当数出版されている。

歴史好きの人々の中には、それぞれ専門分野があつて、

古城址研究、系図研究とかいうように、時には、その道の権威でさえ啞然とする位の実力を備えている人がいる。

仲間どうしは、絶えず連絡しあつて、誰かの研究に役立つ文献など発見されると、すぐに複写し、あるいはカメラに収めて送付する。それが、思わぬ収穫となつたり、時にはホゴ同然と判つて苦笑したり、楽しいものである。赤松研究者は、恐らく全國に五百名はいると思われる。研究といつても、余暇の利用によつてとか、一族であるから、あるいは、他の研究と併せてといつた、おおざっぱな数え方である。床板が本の重みで傾く位に関係本を集めている人もいるし、系図なら徹底して調査しているとか、古城址のことなら何でも収集しているという人もいる。

これらの人々は、損得を度外視して研究されており、

それらを収集して到達した再建への決断は容易ではなかつた。挫折や逃避は出来るものではない。いい出した以上は身命をとして竣工させねばならない。決断には勇気が必要である。自分の生計さえままならない私にとつて、これは悲壯な決心であった。

工事にかかる間もない一月であった。神戸から一人の老婦人が拙宅へ来られた。老婦人はぶ厚い書状を差し出し、新聞に報じられていた法雲寺再建に使つて欲しいと言う。聞けば、かわいい娘を学徒動員で失い、今は錢湯で働きながら蓄えた金だとおつしやる。私は声がつまつて、しばし老婦人を凝視した。すでに達観の域にあらわれる上品な容姿、奥深い身のこなし、私はこの人の善意のためにも絶対に目的を達せねばならないと落涙した。つぎつぎと肉親を失い、年老いて、しかも、働ける間は社会に感謝して奉仕させていただく。残れば意義あることに使つていただける、こんなうれしいことはありません、と立ち去つていかれる後姿を見送りながら、私はそこに菩薩像を拝んだのである。

いつたん心を許しあえれば、快く教えていただける。私の収集している中央の史料も、各地の文献も、大半は仲間の善意によつて求められたもので、いつも深く感謝している。心を許した仲間とは万金の価値がある。

法雲寺再建

人の善なる心は、まことに有難いものである。本の中で呼びかけた赤松円心の菩提寺法雲寺再建が、見事に現実となつて達成できたのである。たつた数ページ、しかも、発行部数も僅か、にもかかからず巨額の淨財が寄せられ、短期間に廃寺が蘇つた。郷土史を研究する者にとって、こんな喜びは生涯に一度と味うことはできまい。郷土の文化財を護りたいという一念から、史料編の中にその重要性を説いた。反響は大きかつた。誰もが欲していることを直截に表現して人々の善意に訴える、これが大切ではないかと思う。ともすれば歯に衣をきせて、それとなく遠慮してものを言いたいご時世である。山をなす手紙の中には、再建のための淨財が同封されていることも度々であった。苦しく哀しい赤松の裏面史が克明に書かれている文面もあつた。

あとがき

歴史とは不可解なものである。時の為政者によつて自由に塗り変えられていく。現実の世界の國々を見ても、すぐ察しがつこうというものである。権力者は實に横暴なものだと、歴史を学んでいていつも思う。

真実といふものは、決して自分から現われようとしたのかも知れない。たとえ、表面に突然現われたとしても、受けとめる自分が虚心に耳を傾け、真実の見える心を持つていなければ、それをつかみとることは出来まい。赤松氏研究という私のささやかな歩みも、私自身の人格形成とおおいに關係があり、円熟して初めて読者の方にご満足のいく発表が出来るのであろう。

完

昭和五十七年に読んだ本から

植村達男

東京出版販売㈱（いわゆる東販）が毎月発行している「新刊ニュース」という小冊子がある。一九八三年一月号が第三九〇号となつていて、もう三〇年以上の歴史をもつてことになる。この第三九〇号に「新春特別企画」として、「一九八二年、印象に残った本」という特集が組まれている。そして、扇谷正造、久保田正文、田中小美昌、中野孝次（原稿到着順）等合計三六名が、それぞれ一九八二年に読んだ中から印象に残った本を各三冊づつ挙げている。丸谷才一「裏声で歌へ君が代」、（新潮社）、大江健三郎「雨の木」を聴く女たち（新潮社）、加賀乙彦「錨のない船」、村上春樹「羊をめぐる冒険」（講談社）、山口瞳「居酒屋兆治」（新潮社）等々複数の人たちから推挙された本も十冊ぐらいあつた。一方、一人の人からしか推されていない本が相当多くあ

る。こういうリストをながめていると、その中に自分が読んだ本が何冊あるかを確かめてみたくなるのが人情である。私の場合は、たつた一冊でしかなかつた。福田宏年が三浦朱門「武蔵野インディアン」（河出書房新社）に次いで挙げている庄野潤三「早春」（中央公論社）がそれである。この本は神戸という街の持つ魅力を描いた好著である。福田宏年は「作者の己れの消し方の見事さと、作品の温み」と推選理由を短かくコメントしている。私も、この本については、田原総一郎監修「田原総一郎の最新ビジネスマン必読書」（昭和五七年・辰巳出版）の中に寄稿した「読書日記のつけ方」という小文の中で言及し、「内容は長編隨筆（？）といつた感じのもの。著者的人柄で読ませる本」と紹介した。

ところで、本誌昨年二月号で、私は「最近の面白本から」という題で、昭和五六年中に読んだ本で面白かった本を二〇冊挙げてみたが、今年も同様なこと（冊数は三〇冊）を試みてみたい。（順不同、年号のないものは昭和五七年発行）

野呂邦暢「小さな町にて」（文芸春秋社）

- 戸田房子「燃えて生きよ」（新潮社）
山福康政「ふろく」（草風館）
井上ひさし「本の枕草紙」（文芸春秋）
開高健「すばり東京」（文春文庫）
清水鶴子「軍靴の音よさらば」（未来社）
窪島誠一郎「父への手紙」（昭和五六年・筑摩書房）
露木まさひろ「興信所」（昭和五六年・朝日新聞社）
田丸美寿々「薔薇は荒野に咲け」
（昭和五六年・東京白川書院）
早川良一郎「散歩が仕事」（文芸春秋）
清岡卓行「薔薇ぐるい」（新潮社）
軒上泊「ブアマンズナイトクラブ」（PHP）
西田敬一・本橋成一（写真）
「サークスがやつてくる」（旺文社文庫）
水田洋「読書術」（講談社現代新書）
加藤秀俊「わが師わが友」
(中央公論社・C・B BOOKS)
小島直記「伝記にみる風貌姿勢」（竹井出版）
フランクリン・鶴見俊輔訳「フランクリン自伝」
「小さな町にて」は昭和五五年五月、四二歳で急逝した

野呂邦暢の青春回顧隨筆で、亡くなる半年程前迄「週刊読書人」に連載されていたもの。昭和三十年前後の長崎県の「小さな町」の高校（県立諫早高校）の美術部の生徒たとの日常が新鮮な文体で描かれている。当時の高校生は（地方では特に）エリートであり、彼らの意識やものの考え方は随分大人びている。また、野呂邦暢の鬱屈した浪人時代は、のちの彼の文学のコヤシとなっているのだろう。彼は大学への進学をあきらめたのち、いくつかの職業を経て自衛隊員になった。そして、昭和四八年芥川賞をとり作家になつたという経歴から「大学卒」の学歴はもつていらない。しかしながら、彼の文章へ特に隨筆）を読むと「大学卒」のレッテルが如何に空しいものかよくわかる。「大学卒」のレッテルを持つ人の中で野呂邦暢並みの学識と見識を持つ人は果たして何%いるだろうか。

「燃えて生きよ」は平林たい子の伝記である。著者戸田房子は平林たい子の晩年には口述筆記の仕事もした人で、平林たい子とは二十年余の交流があつた。私は平林たい子の作品では「林芙美子」（昭和四四年・新潮社）

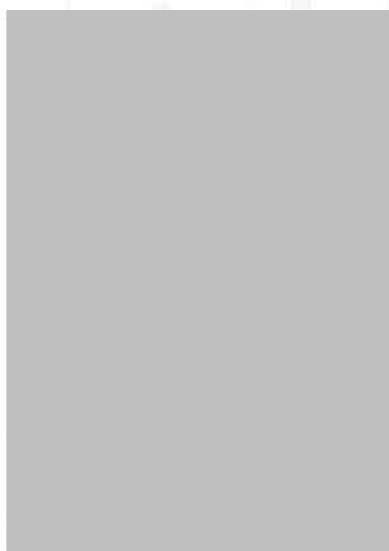
からつくるトコロテンのような「オキトウ」を売り歩きお金を稼いだ。

いわゆる「偉い人」たちからは全く無縁のところで、たくましく生きていく庶民を著者の絵（ちよつと滝田ゆうと似た風情がある）と文が見事に活写している。

一冊を読んだだけである。そこで平林たい子についてはあまり予備知識がなかつた。本書により平林たい子の「凄絶」な人生を知ることができた。また、本書に三十歳になるかならぬかの俊敏な青年江田三郎が登場するのは意外であった。

「ふろく」は全くユニークな本である。約二〇〇ページのうち活字が組まれているのは最後の一ページと奥付のみである。あとは全て著者山福康政（福岡県北九州市在住の俳人・印刷所経営）のイラストと手書き文字から出来ている。内容は著者が満二歳のときから始まる自伝的エッセイであるが、副題の「昭和庶民絵草史」が示すように、絵と文を通じて戦争を挟んだ五十余年間の庶民の生活が実に生き生きと描かれている。

著者は相当の本好きで、行きあたりばつたりに本を買ひこみ、家の中は本だらけ。そして、「時折り、ドカドカと本に埋まる夢を見る」とのこと。ところが、少年時代は「幼年俱楽部や少年俱楽部は正月にしか買ってもらえなかつた」ので遊び友達でもない金持ちの級友に借りてまわつたという。また、小学校五年生のときには海草



私の楊貴妃

『長恨歌』の思い出

しい彩色の楊貴妃は、私が今まで漠然と想像していた肉感的な女性ではなく、細面、柳腰のたおやかな女性である。

1

真砂早苗

今、私の前に一冊の本がある。大修館書店発行、編集解説、川口久雄氏による『長恨歌絵巻』というA四判、厚さ一cmほどの本である。

私はこの本を、朝日新聞の毎週月曜日に、見聞き二頁を使って組まれる読書案内欄によつて知つた。私はこの読書特集が楽しみで、月曜日を待ちかねて丹念に読む。しかしながら、紹介される沢山の本を私の貧しい読書量がついていけるはずもない。紹介記事を読むだけで終つてしまふことが多いのだが、この『長恨歌絵巻』は是非とも欲しいと思い、海文堂さんに頼んで急速取り寄せていただいた。

狩野山雪（一五九〇—一六五一）によつて描かれる美

楊貴妃——私がその名前を知つたのは、まだ小学校にも上がつていらない頃である。
その頃は、正月といえば百人一首が盛んであつた。
△花の色はうつりにけりな……という小野小町の歌を詠みながら、母が幼ない私に言つた。

「小野小町つて日本一の美人だつたのよ。世界の三大美人というのはね、エジプトのクレオパトラと中国の楊貴妃と日本の小野小町なのよ。」

△ふーん△

私は素直に信じた。

何だかわからないが、多くの美女が一堂に会し美人コンテストのようなものが行われてその中から三人が選ばれたに違ひないと想い込んだ。

母もいい加減なものである。生きた時代も人となつた場所も天と地ほどに離れて、同じマナイタの上に立ちも

しないで、何が三大美人なものか。

しかし、楊貴妃という名前だけは幼ない私の心にしつかりと刻み込まれた。

3

あれは私が中学生の頃であつた。

父はその頃、外国航路の貨物船の船長をしていた。ある時、中国の楊子江をさかのぼつて行つた航海の話をしてくれた。

「何日船を走らせて、川幅は果てがないほど渺々としていて、それが川だとは到底信じられなかつた……」父は歴史や文学が好きであった。一本氣で感激屋で能弁であった。自分の感激を、年端もいかぬ私が理解しようとすまいとお構いなしに自分流に脚色して話して聞かせた。私がおとなしく聞いていれば機嫌が好かつた。

白楽天の『長恨歌』の話も父の得意のひとつであつた。

時は八世紀。舞台は唐の都、長安。名君と譽れ高かつた玄宗が絶世の美女楊貴妃との愛に溺れ、やがて政変が起きる。

玄宗皇帝の馬前で安禄山率いる叛乱軍によつて楊貴妃

2

が縊り殺される部分を語りながら父は言つた。

「『断腸の思い』とはこういうことだよ」

しかし、十四・五才の私に、そんな男と女の濃密な愛だの別れだのが理解できようはずがない。

第一、

漢皇 色を重んじて傾國を思ふ

御宇多年 求むれども得ず

といふ出だしからして氣に入らなかつた。

これは権力に飽かせた女漁りではないか。何が悲恋物語だ。中学生の私が憧れる恋とは著しく違つてゐる。そんな男女の関わり合いなどは嫌悪でしかなかつた。

そんな父の相手をするよりも、私はその頃文通していいたボーランドに一刻も早く手紙を書きたいことがあつた。父の話には氣もそぞろだつた。

いきなり、父のげんこつが私の頭にとんだ。私が感動しないのがけしからんというのである。

幼ない時ならともかく、中学生にもなつて、しかも自分がとりたてて悪いことをしている自覚もないのに、いきなりの父のげんこつは私の自尊心をいたく傷つけた。

私もそうそうひまではない。父のお守りばかりはしておれぬ。私は父と三日も口をきかなかつた。

4

高校生になつて、週に二時間ばかり漢文の授業があつた。

化学や物理ではいつも追試すれすれの点しか取れなかつた私も、何かしら取柄はあるもので、漢文だけはいつもクラスで一・二番の成績が取れた。

父にむりやりに聞かせられてうろ覚えていた長恨歌も、多少は役に立つた。言葉がひとつひとつ生きて輝きを増していくのが実に面白かつた。

まさに大陸的表現というか、絢爛華麗な言い廻しにたじろぎながらも、私は夢中になつた。

頭を回らして一たび笑めば百の媚生ず

六宮の粉黛 颜色なし

とか、

後宮の佳麗 三千人

三千の寵愛 一身に在り

とかいう箇所は、クラス中が陶然とした。

との一途さ、哀れさ。男女の愛の極致を私はここに見るような気がした。それは悽絶ですらあつた。

5

そして、二十年ぶりに手にする『長恨歌』

私も人生半ばになつた。あの頃よりはいくらか深く読めるようになっているだろう。七言百二十句。声に出して読めば、歯切れはひときわ美しい。

時に抵抗を感じ、時に共鳴したこの白楽天の一大叙事詩も、玄宗皇帝と楊貴妃の恋物語（波瀾に富んだその愛と死）というだけでなく、世の様、人の情の無限などを考え合わせてみる時、やはり何か計り難いような大きなスケールを感じる。

ダブリンでゆくりなくも発見されたという素晴らしい絵と、噛んで含めるような懇切・丁寧な解説は、特別な知識のない初心者にも充分楽しめそうだ。

春の宵、水割りのグラスでも傾けながら紐解けば、この『大人の絵本』は何よりの道連れではなかろうか。本と人との出逢いも、まさに一期一会である。

しかしやはり、高校生の私が素直に消化するには、『長恨歌』は内容が重過ぎた。玄宗と楊貴妃の結びつきに、もつと言ふならば男女の愛慾といふものに、もうひとつ首肯けないとところがあった。

為政者ともあろうものが、

春の宵は短きを苦しみ 日高けて起く
此れより君主 早朝せざ

とは何ごとだ。動乱が起きるのは当たり前だ。無残な別れを強いられた二人に、私はあまり同情をしなかつた。

しかし、後半、玄宗が妃を救い得なかつた悲しみと彼女への思慕の情に耐えかねて、せめても魂魄にでもめぐり逢いたいと願い、天上霊界へ使者を遣わす段は涙を誘われた。使者は艱難の末、蓬萊山の仙宮で天上の貴妃に逢い妃は使者に玄宗との愛の思い出を語る。そして、天に在りては願はくは比翼の鳥とならん
地に在りては願はくは連理の枝とならん
いわゆる『七夕の比翼連理の誓い』を妃は使者に託す。
『生と死』にひきされた男と女。それゆえに愛はなお一層増幅されるのかもしれない。思い詰めるというこ

メリケン波止場（中）

神戸観光汽船船長 角 本 稔

神戸開港より発展と歴史を港の一角から見つめ、多くの船員やコスモポリタンが上陸し出逢い別かれがあつたメリケン波止場は、私にとつても二十四年間の青春を刻んだ生活の場である。いや私だけでも無く港湾業者の栄枯盛衰、悲喜こもごも人生の歴史を刻んだ舞台であつた。

朝日のあたる波止場に立つて耳をすませば岸壁の石段を洗う波の音、船同志のきしみ、ランチの軽快なエンジンの響き、時折り近くの水面に小魚を追つて群れ飛ぶかもめの鳴き声、みなと保育所の子供達の歌声が聞こえてくる。

この波止場の港における役割は何であつたのだろう。

第一突堤や京橋に面した東側や先端はランチ（交通艇）や遊覧船、タグボートの船着場。中突堤に面した西側ははしけや機動ばしけの船着場又は溜りである。中央は柵

で仕切られているが西側の保税地域には上屋があり香港や東南アジア、ロスアンゼルス行の雑貨が納まつているが生産地は主に近畿や北陸地方である。

その屋上に幼児八十名を保育する「市立みなと保育所」があるが波止場では異色の存在だ。入口に神戸税関監所を設けて「STOP」と表示した柵が置いてあるので一般人や車は思わず入ってはいけないと感じ一瞬ためらうであろう。その脇にノルウェー総領事館が建っている。付近には阪神パイロット組合や海運合同庁舎、水上警察署、第五管区海上保安本部（現在新築中）、艦船業組合、全日本検数協会と港湾関係の役所から業者が軒を連ねているしミニ公園もある。通船発着場だから船客待合所も三ヶ所ありその売店や喫茶店の人々は私よりももっと長く波止場にいてとても港に詳しく海運の事情にも明るく船員からも親しまれている。その待合所の二階が各通船や海運関係の事務所として使用されていて時々屋上のスピーカーから「〇〇丸スタンバイ」とアナウンスが流れ、客が乗ったランチが波止場を離れ沖の碇泊船へ行く。周辺の突堤の役割はどうであろう。東側の新港突堤の



メリケン波止場に着くランチ（通船）

一方中突堤は現在ポートタワーや国際港湾博物館があり港めぐりも出でていて観光地化しているが、汽船や汽船、高速艇が淡路島、小豆島、四国、北九州、奄美沖繩と南西諸島航路が発着するターミナルもある。

- 21 -

- 20 -

大正四年着工したこの突堤は再度昭和四年から延長工事が実施され昭和十二年に現在のような「く」の字型となりその長さも六百三十二m、東側は二百十四、水深九mの波止場である。かつてこの東側は台湾航路が主であった。明治三十年より昭和十六年までの間に大阪商船、日本郵船、山下汽船、辰馬汽船、川崎汽船、国際汽船などが活躍し高雄丸、恒春丸、高千穂丸八千五百四t、高砂丸も就航、日本から建築材料、雑貨、綿など台灣へ、現地の基隆から塩、米、青果物を輸送していた。その後太平洋戦争に突入し昭和十七年五月に「船舶運営会」が設立され、日本沿岸航路や外国航路のすべての路線は同会が運航するという軍の命令航路の規制が敷かれ、これが昭和二十四年九月まで続いたのであった。昭和二十五年四月一日八百t以上の船舶も国家使用解除され民営還元をみたのであるが、当時わが国保有船舶百九十万tは戦標船または老令船で外国航路には不向きであった。海運界はどん底にあったと言えよう。終戦後駐留していた米軍は昭和二十六年三月二十二日に神戸港接收解除を行い神戸市が港湾管理者に復帰し現在の繁栄を見ている。



メリケン波止場(中央)の全景、後方は三の宮

メリケン波止場は新港突堤と中突堤が国内や外国航路に使用されたにもかかわらず、さほど長くなくかつ水深が四し五mと浅いゆえ、大型船の接岸には条件が悪く使用されなかつたのである。

しかし、両突堤や一文字防波堤に囲まれたこの波止場は海も平穏で小型のランチには格好の安全な場所であり、しかも役所や海運会社、商店街、国鉄私鉄の駅にも近く乗下船の船員にとつても地の利を得ていて、神戸税関はここを交通船指定地と定めたのであった。

通路や交通艇(外航船員はサンパンと呼ぶ)は昭和初期まで余り発達せず、櫓による手漕ぎ船であった。昭和四・五年頃には二百隻余あつて貨物船一隻沖に碇泊すると甲板部、機関部、司厨部用として計三隻の通船が必要であった。

通船会社はメリケン波止場の「神戸通船」が安政三年の創業と一番古く、他に中突堤から就航した「中央波止場通船」と島上桟橋からの「川崎通船」と計三社であったのが後者は港の第一期修築工事も終りさらに第一次世界大戦後の好況期に営業を開始した。だが昭和三年に

中突堤の業者が神戸通船と川崎通船の吸収合併を行い、「神戸通船」として再スタートを切つたのである。この頃は海運界も不況をもろに受け海運ストが起つていて、昭和六年九月十八日満州事変勃発。物資や兵員輸送で海運界は活気を取り戻し始め、昭和十年頃には各国の軍備拡張や穀物輸送でさらに飛躍的な繁栄をみたのである。

この頃には港も第二期修築工事が進められ新港突堤の追加兵庫突堤の築造それに伴い沖の防波堤工事も進展し安全に碇泊出来る港の姿を現わしている。

昭和十一年この年の内外航船舶の出入港は開港以来記録の数字を出している。入港船二万七千六十七隻、四千九百三十万t貿易額も輸出八十九億三千万円で対全国比三十五%である。これが明治元年だと百十三万七千円で対全国比4%であったのでいかにこの頃の港に船が多く繁栄していたかが想像できる。

通船もこの時代より急速に改良され手漕ぎ船から機関を備えた近代船が登場。モーターボートが出現しその機関はガソリンを使用する「ピック」、「シボレー」であ

る。大阪から購入し工場で組立てて船に積み込んだ。それは快速であつたであろう。大手汽船会社も自社の交通艇を抱えていたがこちらは「レシプロ（蒸気機関）」が用いられた。

私がこの波止場に来た昭和三十四・五年頃には通船会社が五社営業していた。「メリケン通船」、「日東運輸」「築港興業」、「神戸通船」、「早駒運輸」で神戸通船以外は大手海運会社の子会社あるいは繫船業務としてスタートしたもので戦後通船を始めている。各社で日本船、外国船とあつかいを区別していた。

この他にはレンジプロ船のタグボートや日本郵船の「梅丸」、大阪商船の「初島丸」、「姫島丸」といった大手の交通船、燈台船の「あけぼの」、波止場の根元には艦船業組合、検査協会、個人船主のランチ、曳き船などが波止場狭ましと停っていた。レンジプロ船は長い煙突を持ち早朝より石炭の黒い煙をあげていたが、他の大半は焼玉機関であった。しかし少しづつディーゼル機関を据えたランチが登場しつつあつたのである。

私は昭和四十一年夏まで隣りの会社の通船兼曳き船に

甲板員として乗船していた。その頃の波止場は大変な数のランチが早朝から深夜まで盛んに出入りし、沖には日本船や外国船、とりわけギリシャ、ノルウェー、スエーデン、リベリア船などが多くて銑鉄、スクラップ、綿、原糖、穀物を満載してブイに碇泊した。輸出品は雑貨ばかりで輸入品は一次産品が多かつたのである。北欧船やアメリカ、イギリス船はかなり大きく新しいスタイルの船であるがギリシャ、リベリア船ともなるとアメリカが戦時に大量に造った八千t級の戦標船を安く買いとり就航させた。これでギリシャ船主（オナシス）は大儲けをしたのであらうが、船体や設備は大変に古く、特に荷役用のウインチは蒸氣で、ものすごい音と振動ばかりで力も弱くて荷役がはからなく、関係者を泣かせたものである。

月末月始めは港も大変な混雑であった。その当時あの巨大なボートアーランドや摩耶埠頭は無くて、沢山の貨物船で突堤がすぐに一杯となりブイや港外にまで碇泊して荷役を行うことが多かつたのである。しかも港外で錨を降ろして何日間も沖待ちをするのもしばしばであった。

この船員達がこれ幸いに航海の疲れをいやしにランチで上陸した。このためメリケン波止場は大変な数の人の往来が見られたのである。船員は勿論のこと船会社、家族、商売人と多彩であつた。元町付近に店を構える洋服屋、クリーニング屋、みやげ物屋、船に必要な船具、ペイント、船食屋（シッピチャンドラー）、の人々がランチに乗りまたはチャーターして沖に停まる船へ行くのである。同業者が一番乗りをして注文をとろうと、船が停止するのももどかしく先を争つてタラップやジャコブを駆け登る姿は船員を驚かせたものである。

マドロスの慰安の場は酒場と相場は決つてゐる。その頃の三の宮、元町、南京町、福原は大変に潤つたである。

私も独身の若い頃はよく行つたのであるが、今のように「スナック」とは呼ばず「バー」、「キャバレー」が多く必ず若い女の子が三・四名は居てサービスに努めた。外国航路の船員達は航海中の暇を見ては、たばこの箱でブイを作り赤と白のベンキを塗つて自分の船の名前を記入し、忘れて呉れるなどプレゼントしたのである。その頃は酒も女も安くとても遊び易かつた。

一方外国人達は「外人バー」へ行く。夕方船員が上陸して来る頃になると女の子を車へ乗せたポン引きが波止場へ迎えに来る。彼らがランチから上陸すると女の写真入りの店のPRカードを渡して盛んに勧誘するのである。

「これはどの外船の船員か」と私達ランチの船員はポン引きによく聞かれた。外人も中には馴染みの娘の店を知つていて、さつと車に乗つて三の宮や南京町の外人バーへ行くのである。ポン引きも一人勧誘し車で運べば「一本」とプラスアルファーと收入が増えるので船員が大勢上陸して来ようものなら客引きでそれは大変な騒ぎで交渉がうまく行かない時には波止場の入口までも車で追つて行くのであつた。

遊んだ外人は十一時十五分発深夜の最終便で帰船するが大担にも一諸にランチに乗り彼の船に行って寝る女もいたのである（外人専門の娼婦を洋パンと呼ぶ）。ギリシャ船へ行けば何日間も数人でたらい回しにされるのがよく身が持つたものである。彼女達は港を浮き草のように転々として生活をするが、話を聞いてみると過去、男に捨てられた経験を持っていた。

時には変なのが見送りに来たことがある。様子がおかしいのでよく見ると「オカマ」だった。朝帰りの若い船員と連れだって來たのである。市内で酒を飲みふらふらしているところ間違つて引張られたのだろうか。船員もさまり悪そうに船室の陰に隠れてしまつたがオカマの方は身を斜に構えてよよと手を振り別かれを惜しんでいる様子。深情けと言おうかユーモラスな波止場での光景であつたが、港町だからこの様なことも起こりうるのであらう。

つづく

(参考文献、商船三井、川崎汽船社史、
神戸港一五〇〇年、神戸開港百年史)



ぶつく・えんど

在日外国人向けに、日本語教科書が自費出版されている。出版したのは神奈川県逗子市逗子四一五一六、主婦の竹内博子さんで、書名は『学びやすい日本語』(B5判、三百七十六ページ、定価五〇〇〇円)。この教科書は、自習しやすいように一課ごとに見開きにし、一課一話になっていて全体で三十二課。習取すべき文型三百を、やさしい順に織りこんで、全体で二〇〇〇語がマスターできるようになっている。日本語のテキストは何種類か発行されているが、竹内さんは使ってみて「納得いかなかつた」という。竹内さんの日本語テキストは凡人社から発売され、印刷部数は二〇〇〇部。全章を吹き込んだカセットテープ(定価五〇〇〇円)もある。独習の場合はぜひカセットもそろえてほしい、という。お問い合わせは、電話で。(毎日新聞十二月十六日)

ま

* * *

十二月二十三日)

*

*

*

一九八三年のスクランブルックを休みの日に読み直してみた。出版界全体のことば、五月ごろに『出版年鑑』

大阪市内に住む老エスペランチスト・宮本正男さんが、心臓病をのりこえて、十年がかりで千ページを越える日

本語―エスペラント(和エス)辞典を完成させ、日本エスペラント学会から刊行された。和エス辞典は現在十種類ほど出版されているが、いずれも初心者向けの簡単な小型本が多く、本格的な辞典としては一九三五年に同会から発行された「新撰和エス辞典」が唯一だった、といふ。実に四十七年ぶりの新辞典だ。B5判で一〇八〇ページもあるこの新辞典は「天照大神」から「オフィスオートメーション」まで収録語は約七万語。この大型版(五百部)のはかに、市販用に小型(B6判・一万部)も印刷、三月から販売される。宮本さんは現在六十九歳。ベースメーカーをつけ入院をくり返しながら、孤独な作業、そんな中でも新しい辞典への情熱は消えることなく、ついに十年の星霜を数えて完成された。(毎日新聞

の中で整理されて詳細に記録されることだろう。僕は私的なスクラップを盗用関係のものに限って拾いあつめて、日付順に並べてみることにする。

▼ 二月二十三日（朝日）

NYタイムズ紙は昨年（一九八一年）十二月二十日付日曜版別刷り「ニューヨーク・タイムズ・マガジン」掲載のカンボジアに関する寄稿記事が筆者の創作であることを全面的に認める記事を掲げた。ワシントンポスト、デーリー・ニュース紙などこのところ米紙に相次いでっと上げ記事はついに名門ニューヨーク・タイムズ紙にまで波及した。

▼ 二月二十七日（読売・夕刊）

早稲田大学政経学部長の著書に、外国の経済学者論文が一部、無断引用されていた疑いが出てきた。問題の著書は『現代経済政策論』（東洋経済新報社）。小松教授が担当したうち、昌頭部分の約三ページが、アメリカの経済学者のマイヤー氏らが発表した経済論文の「エコノミック・デベロPMENT」の経済成長理論

を、そのまま、翻訳、引用しているというもの。
▼ 七月三日（読売）
社会派の推理作家、小林久三さんが週刊誌に連載した「ノンフィクション・ノベル帝銀事件」にフリーのライターが「盗作だ」とクレームをつけている。自分が帝銀事件を追って発表したルポルタージュの構成、内容を大幅に借用し、そこからヒントを得て、といふものだ。これに対し、小林さんは「あのルポルタージュの内容は研究家の間では公知の事実のうえ、参考にさせてもらった点については了解済みで、心外」と反発している。

▼ 七月七日（読売・夕刊）

近畿大学の経済学教授が十数年にわたって講義用に使っていた経済学の教科書が、実は一橋大学長ら経済学者の著書の文章を三十一カ所も「盗用」、丸写しだったことが大学や出版関係者の指摘で七日わかった。

▼ 九月四日（朝日）（神戸）

京都市の国立京都国際会館で六日、世界中の研究者が集まって、遺伝子工学の研究成果を発表した。「第

四回応用微生物遺伝国際シンポジウム」（GIM）の全記録を「海賊」録音したカセットテープを三十万円で売る、というダイレクトメールが、大阪市の業者から遺伝子工学関連企業に送られていたことがわかり、

研究発表した学者、研究者二十六人が三日、この業者を著作権法違反で大阪地検に告訴した。

▼ 九月四日（神戸）（読売）

評論家、竹村健一氏の著書として夏に出た『もっと売れる商品を創りなさい』という本の中に、西部系企業のバルコの月刊誌「アクロス」二月号から無断で引用されている部分が大量にあることが三日、明らかになつた。竹村氏の本の出版社も転載の事実を認めている。

▼ 九月五日（神戸）（読売）

ユニークな商法で有名な角川書店が本格的本地名大辞典として六月に出版した『角川日本地名大辞典』の「京都府版」上下二巻に京都市の郷土史家の会が出した写真集から二十八枚の写真が無断転載されていることが四日、分かった。この郷土史家は「大手の出版社

※ 手もとのスクラップからは、これら九件の盗用、盗聴の記事を拾い出すことができた。これ以外にも盗用

の例はあるに違いない。一つ一つの事例には事後談もあり、原因もそれそれが異っているようで、興味が湧いてくるのだが、それを探ることは「噂の真相」にまかせることにしよう。ただ、ここにも世相が表現されているように思えるし、出版の一面が暗い色彩で浮かんでくる。印象的なのは、九件のうち三件が大学教員の盗用であることで、そのモラルの低下は目をおおうばかりだ。

* * *

国内の歴史学者・学徒の研究団体である歴史学研究会（荒井信一委員長・二七〇〇名）が昨年十二月に創立五十周年を迎えた。このたびその五〇年の軌跡を『歴研半世紀のあゆみ』（A5判・二六一ページ・一五〇〇円）としてまとめた。主な内容は、「歴史学研究会年表」「資料」「座談会」「歴史を語る」、歴研関係出版図書一覧など。発行は歴史学研究会、発売は青木書店。（「出版ニュース」一月下旬号）

郷土誌の窓

神戸空襲を記録する会の事務局長で詩人の君本昌久さんの本『詩人をめぐる旅』が昨年十一月に発行された。神戸を中心に十人の詩人を取りあげて、戦争と詩人との関わりを中心に詩人の心底に迫った評伝と詩論集だ。昨年三月になくなつた神戸の代表的詩人竹中郁や、二十一歳で鉄道自殺した久坂葉子、三十六歳で病死した岬絃三などをとりあげている。発行所は太陽出版。

* * *

「一九三〇年代朝鮮共産党の再建運動」「朝鮮語学会の語文運動」「日帝下の朝鮮歌謡曲史」など、メンバーがこれまで手がけてきたテーマ七編を集録している。在日の新しい世代による研究成果だ。「むくげの会」は、神戸市灘区山田町三丁目、神戸学生青年センター内に事務局をおいて活動を続いている。

* * *

昨年十一月には兵庫県高等学校教職員組合（兵高教組）が結成三十周年を迎え、記念誌を発行している。『兵高教組三十年史』で、B6判、二一五ページ。昭和二十七年の結成以後、教育二法反対闘争、六〇年安保、八鹿高校事件、主任手当拠出運動、昨年表面化した教科書問題までの活動を時代を追つて詳細に記録したもの。歴代幹部四十二人の「思い出の記」や年表も掲載している。（神戸新聞十一月二十八日）

* * *

朝鮮語を学び、朝鮮の歴史を知ろうと地道な活動を続いている市民グループ「むくげの会」が論文集を発行した。『朝鮮一九三〇年代研究』（三一書房刊・三八〇円）がその本。朝日新聞十一月二十日付の記事によると、「むくげの会」は神戸・阪神間の会社員、団体職員ら十二人で週一回の勉強会を重ね、研究、書評、時評の小冊子「むくげ通信」を隔月で出してきた。この論文集の中には「永興農民組合の展開」「金元鳳の思想と行動」

兵庫県が生んだ美人画家寺島紫明画伯（一八九二一一九七五）の素描集が昨十二月に発行されたことが、読売新聞（十二月十九日付）に出ていた。記事によると、発

行したのは画伯の愛弟子で、西宮市大谷美術館内、阪神アートアカデミー日本画教室の講師・山平義正さん。紫明画伯は明石市の出身。犬と猫をかわいがり生涯独身を通した「孤高の日本画家」として知られる。素描集は、画伯の没後七年を記念したもので、昭和九年の「ひととき」から四十九年の未完絶筆の「舞姫」までの百二十六点と、年譜、アルバムなどを収めている。二百五十部限定出版で定価二万円。お問い合わせは、神戸市長田区大橋

* * *

「一絃琴あけばの会」の小路玉翠さんが同会の二十年史『藻沢のしらべ』を出版されたことが神戸新聞（十二月六日）に出てる。記事を紹介しよう。一絃琴の起源については幾通りかの伝説があるが、史実として分かっているのは十八世紀に河内の僧・覚峰によつて創始されたということだけ。覚峰以後、今日までの二百年間に高知、東京、神戸へと広がり、神戸では昭和三十六年、和田玉邦によつて「あけばの会」が誕生し、芦屋の一絃琴研究家加藤盛男氏宅で同氏と家族、画家中西勝夫人咲子

たって要領よく説明されている。一部三百五十円。お問い合わせとお申しふみは、神戸市兵庫区永沢町 [] まで。（朝日新聞十一月十六日）

* * *

親しみのある文章で知られる「アサヒファミリー」の重森守編集長が同紙の一面下に書き続けてきた時事エッセイが、神戸新報社から発行された。書名は『阪神版木』（半信半疑）（九百八十円）。社会のいろいろなでき事を軽妙なタッチで描いたものだ。十二月初旬に入荷しました。当店郷土誌コーナーでご覧ください。

* * *

昭和十九年末から二十年夏にかけて五十数回、大阪の街と人々を地獄に陥れた「大阪空襲」が、体験者の手で百二十四枚の水彩画に描かれ、三日に『母から子どもたちへ 画集大阪大空襲の記録』「仮題」として出版されることになった。「大阪大空襲の体験を語る会」が二年余にわたつて集めたもので、戦災体験が画集になるのは原爆被爆以外では初めてだという。関西大学文学部教授

さんと、年譜、アルバムなどを収めている。二百五十部限定出版で定価二万円。お問い合わせは、神戸市長田区大橋

* * *

「一絃琴あけばの会」の小路玉翠さんが同会の二十年史『藻沢のしらべ』を出版されたことが神戸新聞（十二月六日）に出てる。記事を紹介しよう。一絃琴の起源については幾通りかの伝説があるが、史実として分かっているのは十八世紀に河内の僧・覚峰によつて創始されたということだけ。覚峰以後、今日までの二百年間に高知、東京、神戸へと広がり、神戸では昭和三十六年、和田玉邦によつて「あけばの会」が誕生し、芦屋の一絃琴研究家加藤盛男氏宅で同氏と家族、画家中西勝夫人咲子

さんと、年譜、アルバムなどを収めている。二百五十部限定出版で定価二万円。お問い合わせは、神戸市長田区大橋

* * *

日本とオランダ両国との文化交流を通じて、相互理解と親善をすすめようと、神戸日蘭文化交流協会が設立されることになった。オランダのペアトリクス女王の誕生日である一月三十一日に設立。主な事業は、文化・学術・経済・スポーツなどの各分野にわたり、オランダ文化を日本で普及する一方、日本文化をオランダへ紹介する。（朝日新聞十二月十五日）

* * *

神戸市立中学校新聞教育研究部が『学級新聞のつくり方』という冊子をつくった。「なぜ新聞をつくるのか」から説きおこし、組織づくり、企画の立て方、取材のしかた、記事の書き方、見出しのつけかたなど、全般にわ

さんと、年譜、アルバムなどを収めている。二百五十部限定出版で定価二万円。お問い合わせは、神戸市長田区大橋

* * *

日本とオランダ両国との文化交流を通じて、相互理解と親善をすすめようと、神戸日蘭文化交流協会が設立されることになった。オランダのペアトリクス女王の誕生日である一月三十一日に設立。主な事業は、文化・学術・経済・スポーツなどの各分野にわたり、オランダ文化を日本で普及する一方、日本文化をオランダへ紹介する。（朝日新聞十二月十五日）

* * *

日本とオランダ両国との文化交流を通じて、相互理解と親善をすすめようと、神戸日蘭文化交流協会が設立されることになった。オランダのペアトリクス女王の誕生日である一月三十一日に設立。主な事業は、文化・学術・経済・スポーツなどの各分野にわたり、オランダ文化を日本で普及する一方、日本文化をオランダへ紹介する。（朝日新聞十二月十五日）

* * *

日本とオランダ両国との文化交流を通じて、相互理解と親善をすすめようと、神戸日蘭文化交流協会が設立されることになった。オランダのペアトリクス女王の誕生日である一月三十一日に設立。主な事業は、文化・学術・経済・スポーツなどの各分野にわたり、オランダ文化を日本で普及する一方、日本文化をオランダへ紹介する。（朝日新聞十二月十五日）

* * *

学生の成績を予選から決勝まで漏れなく掲載、記事よりも記録に重点を置いたユニークな記録月刊誌だ。定価は三百八十円。お問い合わせは、大阪市淀川区西中島スポーツグラフィック社まで。

* * *

新しいタウン誌が登場した。女性ばかりのスタッフで女性読者を対象に創刊された「L a 神戸」だ。十二月三十日付の朝日新聞の記事によると、創刊号はB5判、八〇ページで一部二百五十円。トップ記事は、布引に誕生した遊芸指南塾を取りあげた「お好みルポ」。専修学校を出て各分野でプロを目指す女性に焦点をあてる「女道ひとすじ」や「わたしの人生」、ちょっとした町の話題を拾う「マイホームたうん」を連載する計画という。女性タウン誌の今後が楽しみだ。同誌へのお問い合わせは「フロント」(電話 [REDACTED])まで。

* * *

県北の名湯城崎の古代から現代にいたる数々の物語を記した『城崎物語』(一一〇〇円)が発行された。温泉地として一千年の歴史を持ち、文学や政治とのかかわり

も深い城崎は、数々のドラマを生んできた。この本は神戸新聞但馬版に連載されたものをまとめたもので、写真や図版も多数収録されていて最良の城崎通史になっている。執筆は神戸新聞の渡辺昭義記者、発行所は神戸新聞出版センター。

* * *

ポートピアでは多くのコンパニオンたちが登場して華やかなドラマを演出した。入場者達の目の前に立つコンパニオンの笑顔が、ポートピアの印象として残ったという人もいる。このコンパニオンたちの選考から、会期中の活躍を、つぶさに書いた『ポートピア'81 裸のコンパニオン』(一二〇〇円)が先ごろ発行された。当事者であつた森田剛彰さんの手になるだけに、感傷的な内容ではなく実態を正確にとらえた記録の本という印象だ。コンパニオンの職業的な面での確立も提唱しておられる。企画・編集・印刷は六甲出版、発行は神戸国際会館。当店にて販売中。

* * *

加古川流域史学会の「季刊・河」(二十四号)が届い

た。主な目次を紹介することにします。

○播磨における「二義的蓋状穴」の

一 考 察 三浦孝一

○庵野船座の構造について 野川 至

○私の海藻往来 (2) 内海敏春

○播磨国三草藩の蔵米切手 脇坂俊夫

○流行禁止―市川と船場川 柳沢 忠

同誌は当店で毎号十部お預りして販売しています。定価五〇〇円。

(N)

海文堂案内版

おもちの皆さんには楽しんでいただることでしょう。
続いて、十九日から二十五日までは「松本幸治郎個展」
を開催する予定です。ご期待ください。

★ 二月に入りました。春までの道のりはまだ少しあります。太陽は確実に北上しているのが、風のない晴れた日に感じることができます。山あいの谷や湿地には、ぱつぱつふきのとうの黄緑色の芽がめぶいていることでしょう。梅の便りが南から届いてきました。さあ、もうすこしで春です。地上の生き物たちが活発に活動をはじめます。

★ 二階ギャラリーのご案内から。ギャラリーでは、二月二十一日から二十七日まで「詩と書画展—生存の疼きと証しの中から」を開催いたします。出品者は小野十三郎、白石かずこ、宗左近、中村真一郎、野間宏、埴谷雄高、堀田善衛、松永伍一さんなど三十五名の方たちの作品を展示する予定です。ご来場をお待ちしています。

三月に入りますと、五日から十八日まで「モーツアルトフェア」を開催します。クラシック音楽に興味を

★ 一階東入口前のブックプラザでは、二月十六日から二十八日まで、出版社ブックフェアの第一〇回目、思索社のブックフェアを予定しています。動物の本など、点数はそんなに多くありませんが、奥ゆきのある本をご覧いただきたいと思っています。

三月になると、一日から十五日までは、出版社別ブックフェアの第十一回目、青土社のブックフェアを、十六日から三十一日までは第十二回目、弘文堂のブックフェアを計画しています。この弘文堂のフェアで、九月のサルマル出版会から始まりましたロングラン企画は、ひとまず終幕といったします。

四月からはテーマ毎のブックフェアを短いサイクルで連続して開催していきます。詳細は次号でご案内する予定です。

★ 文庫ゾーンでは、絵画・漫画・写真など視覚的な内容を持った文庫本をズラリと集めてみました。題して

「ビジュアルに、もっとビジュアルに」。このビジュアル傾向は今後さらに広範に、さらに加速度をますことを思います。このビジュアル文庫本は、今回集めたものだけで一〇〇点をこえました。二月下旬まで開催いたします。

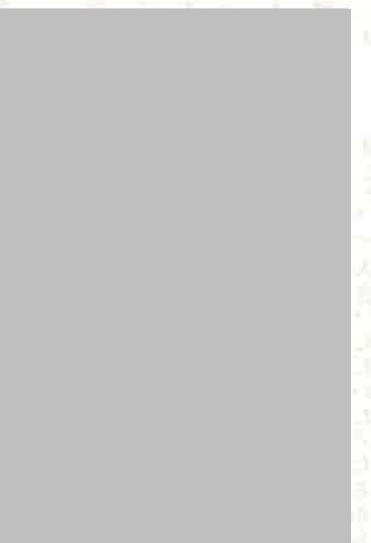
★ 新書ゾーンでは、現在△酷税とたかおう—税金一〇番△と題して税金関係の本を二十点ほど展示しています。三月の確定申告に向けて参考にしていただければと思っています。三月に入ると、健康をテーマにした△シェイプアップの本△フェアを予定しています。

★ 二階海事書ゾーンでは、商船ファンのための小雑誌「船と港」を創刊号から最新の十八号まで揃えています。同誌は限定出版ですので書店での販売は当店のみ。商船の好きな方にはこたえられないミニ雑誌です。発行は堺市在住の池田良穂・幸子夫妻ですが、一月にドイツへ長期留学のため出立されましたので、帰国まで休刊ということになりました。池田さん発行の本は、「船と港」以外では左記の四点を当店で販売しています。

★ 当店の絵本ブック・クラブは発足して半年を経過しました。ご入会いただいた方たちからは「バラエティに富んだ、質の高い絵本が読める」と喜んでいただいている。この△絵本ブック・クラブ△は入会時期は自由で、いつでも、誰でも、気軽にご入会いただけます。当店のセレクトした絵本72冊の中から、お子さま・お孫さんに合った絵本を選んでいただき、日一・二冊お渡しするシステムです。読書カードの記入や、クリスマス・プレゼントなどの特典もございます。詳細

は一階中央のインフォメーションコーナー、または児童書ゾーンまでお問い合わせください。他のところ

で「アートゼミ」についてお問い合わせの方へ、お手数ですが、お電話にてお問い合わせください。
アートゼミは、アートと学びを組み合わせた、創造的で
実験的な授業です。その性質上、講義用紙、参考用紙
などの教材が用意されていませんので、参考用紙を複数
枚持つことはできません。参考用紙は、参考用紙に記載
してある「アートゼミ用参考用紙」を複数枚持つこと
で構成されています。参考用紙は、参考用紙の表紙に記
載してある「アートゼミ用参考用紙」を複数枚持つこと
で構成されています。



（アートゼミ用参考用紙）
アートゼミは、アートと学びを組み合わせた、創造的で
実験的な授業です。参考用紙には、参考用紙用紙の表紙
に記載してある「アートゼミ用参考用紙」を複数枚持つこと

で構成されています。参考用紙は、参考用紙の表紙に記
載してある「アートゼミ用参考用紙」を複数枚持つこと
で構成されています。参考用紙は、参考用紙の表紙に記
載してある「アートゼミ用参考用紙」を複数枚持つこと
で構成されています。参考用紙は、参考用紙の表紙に記
載してある「アートゼミ用参考用紙」を複数枚持つこと
で構成されています。

海文堂書店 1983・3 [14]

〒650 神戸市中央区元町通 3—5—10
(電)